

令和 3 年 5 月 13 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02569

研究課題名(和文) 発見資料に基づく昭和戦前期長崎県対馬における小学校国語科読み方教育の研究

研究課題名(英文) A Study of Reading in Primary Education in Tsushima before the Second World War

研究代表者

安 直哉 (Yasu, Naoya)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：30230204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：大正末期から昭和初期の国語科読み方教授は、中央集権型官製カリキュラムに拠って形成されていたと言われている。しかし、中央から遠く離れた長崎県対馬の地で(一部分ではあれ)中央集権型官製カリキュラムに風穴を開けるような、地域独自の解釈が取られていたことが明らかになった。対馬島内にあった蔵原尋常高等小学校は独自に『小学校読方教授細目』を編纂した。その内容を精査すると、「日鮮の融和」の思想が含まれていることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昭和戦前期においては、師範学校附属小学校の教員の中には実践研究の業績を残した者も多かったが、一般の公立小学校の教員で実践研究の業績を残した例は多くはなかった。本研究はそのような常識を覆す発見となった。長崎県対馬という遠隔島嶼の公立小学校の教師集団が、菊判1338ページという読み方教授細目の大作を作り上げていたという事実は、これまでの戦前期公立小学校教員像を更新するものである。

研究成果の概要(英文)：Generally speaking, before the Second World War, reading in Japanese primary education was strongly under the influence of the central curriculum. But in Tsushima (there was an area far from Tokyo), an original curriculum was partly worked out.

The teachers of Izu-hara primary school (it was in Tsushima) prepared an instruction program. This program included the thought of friendship between Japan and Korea.

研究分野：国語科教育

キーワード：国語教育史 読み方教育 『尋常小学国語読本』 教授細目

1. 研究開始当初の背景

(1) 2016（平成28）年1月に、筆者は長崎県内の、とある古書店で厳原尋常高等小学校編『小学校読方教授細目』（1931年）（図像①）という図書を見つけ、早速購入した。

厳原尋常高等小学校とは、長崎県対馬下県郡厳原町にあった公立小学校である。長崎県の対馬という遠隔島嶼内の一小学校が、1931（昭和6）年に菊判1338ページもの極めて大部な読み方教授細目を完成させていた。全国の小学校の総本山とも形容された東京高等師範学校附属小学校の読み方教授細目が（尋常科246ページ+高等科145ページ=）391ページであり、ページ数だけでも約3.4倍に達する。

この『小学校読方教授細目』という図書は、（2019（平成31）年3月5日現在で調べた限り）国立国会図書館には所蔵されていない。そのみならず、CiNii-booksで検索する限り、全国のいずれの大学図書館にも所蔵されていない。さらに長崎県内公共図書館等横断検索サービスにかけても一件もヒットしなかった。学界でその存在すら知られていなかった新発掘の図書なのである。

(2) 戦前においては、師範学校附属小学校の教員の力量は高かった一方、一般の公立小学校教員が目される業績を残すことはあまりなかった。今回発掘した資料からは、これまでの国語教育史の常識を超えた事実が見えている可能性が大きい。

2. 研究の目的

(1) 1918（大正7）年度から昭和初期までの間、尋常小学校の国語科では、『尋常小学国語読本』（国定第三期国語教科書）という国定教科書が使用された。（従来の『尋常小学読本』も併用されていたもの）基本的には全国津々浦々で使用された。

同教科書を実際に教えるにあたっては、参考となる教授細目が必要となる。教授細目とは教科書に掲載されている全課・全教材に関して、難語句の意味や文意を詳述するとともに教授の段階や過程までも提示した教師用の図書である。『尋常小学国語読本』の教授細目の代表的なものは東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編『小学読方教授細目』（培風館）（1925年）である。また高等小学校国語科の読み方教授細目としては同じく東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編『高等小学読方教授細目』（培風館）（1928年）が挙げられる。これらの教授細目が全国の小学校に与える影響は大きかった。

このように大正後期から昭和初期にかけては、東京高等師範学校附属小学校によって作成された教授細目が、全国の小学校国語科読み方教授（特に『尋常小学国語読本』の教授）の手本となっていた。つまり、昭和戦前期の小学校の国語科読み方教育内容は、国定教科書によってその骨格が規定され、東京高等師範学校附属小学校によってそこに肉付けがなされるという、中央集権型官製カリキュラムの色彩が濃かったというのが通説である。

しかし今回発掘した厳原尋常高等小学校編『小学校読方教授細目』は、遠隔島嶼内の一公立小学校が独自に作成した教授細目であり、中央集権型官製カリキュラムという通説を根底から覆す可能性がある。

(2) 厳原尋常高等小学校を中心とした長崎県対馬の小学校では、『尋常小学国語読本』にどのような地方色を付与して教授したのかを探究するのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 今回発掘した資料である厳原尋常高等小学校編『小学校読方教授細目』を熟読して、対馬ならではの教授内容を抽出する。当該の課（教材）が、全国で流通している教授細目・指導書ではどのように解説されているか。それに対して厳原尋常高等小学校編『小学校読方教授細目』では、地方色をどのように反映させた解説を成しているかについて、比較し考察する。

(2) 『尋常小学国語読本』に掲載された代表的な課（教材）に焦点を当てる。その教材の解釈がどのように展開していくかについて、全国で流通している教授細目・指導書等を視野に入れて考察していく。その中であって、厳原尋常高等小学校編『小学校読方教授細目』における解釈がどのような位置づけを与えられるものなのかを考究する。

4. 研究成果

(1) 『小学校読方教授細目』編纂の直接的契機は、長崎県からの研究委託にあった。『小学校読方教授細目』の「序言」には次のように書かれている。

「当校は本年度長崎県より国語科教育の研究を委託せらるゝに際し、（中略）茲に国語学習の合理化を企図し、其の参考資料たる「読方教授細目」を編纂せし所以である。」（ページ不記）

厳原尋常高等小学校は、対馬島内で最も早く開校し、名実ともに対馬を代表する名門校である。対馬島内で研究委託をするならば、厳原尋常高等小学校を措いて他には考えられない。

では、視点を転換して、対馬の言語生活の実態はどのようなものであったのだろうか。戦後の1950（昭和25）年から1951（昭和26）年にかけて、八学会連合対馬共同調査団（次年度から

は九学会連合対馬共同調査団)による対馬調査が実施された。ここでは、そのうちの日本言語学会の調査に着目する、言語班7名によって対馬方言が調査された。その調査報告の「総記」において、金田一春彦は次のように要約している。

「対馬の方言には、朝鮮語の影響はほとんど見られない。全島の方言は純粋の日本語と言ってよい。これは地理的環境・歴史的事情から言って、注目すべきことである。」(『人文 特集 対馬調査』1号、p.64)

対馬方言には朝鮮語の影響がほとんど見られず、純粋日本語そのものであった。この事実は、国語の純化による国民精神の発揚が可能となる基盤が保全されていたことを意味する。『小学校読方教授細目』成立の根本的背景は整っていたのであった。同じ言語班で「語彙調査報告」をまとめた堀井令以知は次のような感想を述べている。

「なるほど、鰐浦から釜山まで戦前なら船で約三時間という距離であるが、朝鮮語の影響は至って僅少で、鰐浦で筆者の接した人々は非常に標準語に憧れを懐き、島内でもかえってその国語愛好の精神の強さがうかがわれるから、かかる事情も尤もと思われるのである。」(『人文 特集 対馬調査』1号、p.65)

対馬島民は、「標準語に憧れを懐き」、「国語愛好の精神」に満ちていた。辺境の遠隔地であるがゆえに、かえって中央の標準語に強い憧憬を抱いていたと言えよう。「国語愛好の精神」が島全体を覆っていたがために、国語科教育の研究にも顕著な抄りを見せ、その結果、菊判1338ページもの大部の『小学校読方教授細目』の完成に邁進できたものと考えられる。

(2)『小学校読方教授細目』に見る教材解釈観について、以下では代表的な二例についてまとめていく。

『尋常小学国語読本』巻10第13課に「京城の友から」という教材が掲載されている。京城(現在のソウル)の様子を綴った手紙という文章形式になっている。『小学校読方教授細目』では、本課の「要旨」を次のように記述している。

「通信文により京城を通じて朝鮮の一般を知り、親しみの感を起させ日鮮の融和にすると共に地理的事項を授ける。」(尋常科第5学年、p.117)

「地理的事項を授ける」ための前提として、まずは「日鮮の融和」が掲げられている。日本と朝鮮の中継地として激動の歴史を有する対馬ならではの発想である。観念ではなく、血肉を通じた実感として日鮮融和を唱えている。さらに指導過程の解説では次のように述べている。

「朝鮮について正しい理解を得しめること、これが現在の日本として最も肝要な事であらう。」(尋常科第5学年、p.119)

このように力説する背景には、日本本土において、朝鮮についての無理解や誤解が蔓延していたことへの憂慮があったと考えられる。「日鮮の融和」の重要性を体感している対馬の教育者であるからこそ言える発想である。

『尋常小学国語読本』巻10第22課に「捕鯨船」という教材が掲載されている。捕鯨船の活躍を描いた課である。この教材においても『小学校読方教授細目』では、以下のような対馬ならではの解説を加えている。

「対馬の捕鯨は東洋捕鯨株式会社の事業に属し豊崎村大字川内に根拠を置き夏と冬の両季に事業を行ふ。(中略)事業開始になると同地方は事業員のために活気づき、飲食店料理屋等の出張開業するもの多く盛況を呈するが地方の風紀等には良影響は及ぼさないといふ。」(尋常科第5学年、p.154)

対馬上県郡豊崎村における捕鯨の状況を記している。島内の村を例に取ることで捕鯨を身近で、実際の経済活動として認識できる。「地方の風紀等には良影響は及ぼさないといふ。」といった、マイナスの事情も記していることに着目したい。多くの指導書は一般的概説的なことしか書けないため、固有に派生する問題点などには目が届かない。そこに中央集権型官製カリキュラムの限界がある。しかし、地方の実情を踏まえて作成された指導書・教授細目には、その地方でしか知りえない弊害や問題点をも指摘できる。戦前の読み方教授において、中央集権型官製カリキュラムの限界を克服した試みが、地方遠隔地から既に起きていたのである。

(3) 国定第三期国語教科書、国定第四期国語教科書、そして戦後の国定第六期国語教科書に掲載された長寿教材「小さなねぢ」の教材解釈史を通観し、その中において『小学校読方教授細目』に掲げられた教材解釈がどのような位相のもとにあるかを考察した。

教材「小さなねぢ」は、非常に小さな一つの螺子の視点から語られる物語である。自分は小さくて役に立たないと悲観していたが、ある事件がきっかけで、自分のサイズでしか修理できない懐中時計の存在を知る。その懐中時計が息を吹き返したことにより、小さな螺子は自分の存在意義を悟るという話である。

『小学校読方教授細目』では、本教材に関して次のような理解を示している。

「小さなねぢが初めに自分の情ない身に悲しんでゐる時、偶然の事変から遂に小ぼけな自分が一団の活動に欠くべからざる重要な使命を有する事に気付いて満足するまでの刻々の心の変化を十分に読ませなければならぬ。ねぢの話は寓意の存する処で、以て自己の尊貴を自覚しなければならぬ。又社会の組織は必ずしも強い者、大きいものばかりが必要ではなく、外形上小さいものや、弱いものも亦重要な位置を占めてゐることを思はせたい。」(尋常科第6学年、pp.137-138)

この小さな「ねぢの話は寓意の存する処」だと言う。一種の寓話と捉えている。国語科文学教材の多くを寓話として読むという傾向は、近代国語教育の根底に連綿と引き継がれてきた読み方方法論なのである。

(4) 国定第三期国語教科書、国定第四期国語教科書、そして国定第五期修身教科書に掲載された長寿教材「鐵眼の一切經」の教材解釈史を通観し、その中において『小学校読方教授細目』に掲げられた教材解釈がどのような位相のもとにあるかを考察した。本教材は以下のような話である。一切經は仏教に関する書籍を集めた一大叢書である。幾千巻にもものぼるため、その出版は容易ではない。二百数十年前、黄檗山万福寺に鐵眼という僧がいた。一切經を出版しようと思ひ立ち、資金を募った。出版のめどが立ち、着手しようとする折、大阪で出水災害が発生した。鐵眼は資金の悉くを被災者の救助に充てた。その結果一銭も残らなかった。しかし鐵眼は少しも屈する事なく再度募集に着手する。数年かけて再度出版に漕ぎつけるまでに近づいた。しかし、今度は近畿地方に大飢饉が起こる。鐵眼は人々を救済して、またもや一銭も残らない状態に至った。鐵眼は第三回の募集に着手した。その結果、最初の募集から18年後に至って、一切經の大出版が遂に完成した。

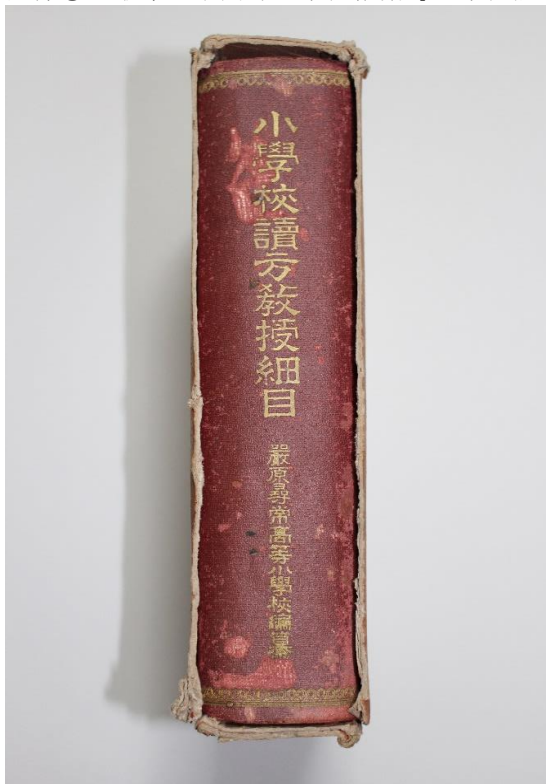
『小学校読方教授細目』では本教材の「要旨」を次のようにまとめている。

「鐵眼の一切經を出版した話によつて、その忍耐と慈悲心とを知らしめて之に対する敬慕の情を起さしめ、底力のある根気を養成する。」(尋常科第6学年、p.91)

同書でも述べられているように「忍耐と慈悲心」というのが、国語教科書掲載の「鐵眼の一切經」の主眼として広く支持されていく。

しかし、修身教科書に転載されると、本教材の主眼は大きく変わった。鐵眼が喜捨を募集したことに倣って、献金を奨励するための教材になった。その背景には戦時下の軍事費増大の一部を献金でまかなうという意図が働いていた。

図像① 巖原尋常高等小学校編纂『小学校読方教授細目』(1931年)の背表紙



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 安 直哉	4. 巻 68巻1号
2. 論文標題 昭和戦前期長崎県対馬における小学校読み方教育小考 巖原尋常高等小学校編纂『小学校讀方教授細目』の考察を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 = 人文科学 =	6. 最初と最後の頁 225-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安 直哉	4. 巻 67巻1号
2. 論文標題 国定国語教科書教材「小さなねぢ」の考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 = 人文科学 =	6. 最初と最後の頁 193-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安 直哉	4. 巻 69巻1号
2. 論文標題 国定教科書教材「鐵眼の一切經」の考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 = 人文科学 =	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------